

本

年の公開が待たれる映画の中
でも、特に話題になっている

のが、シリーズ通算第25作となる
『007/ノー・タイム・トゥ・ダイ』
である。主演のダニエル・クレ
イクは、今作でジェームズ・ボンド
役からの引退を表明しているが、
彼のハードボイルドな魅力を高く
評価しているのが、服飾史家でエ
ッセイストの中野香織氏だ。

「それまでコメディータッチに傾
くこともあったボンドを、原作に
あるほとんど笑わない冷酷非情な
姿に戻したのがダニエル・クレイ
クでした。『007/カジノ・ロワ
イヤル』（2007年）に抜擢された
当時はバッシングも多かったので
すが、公開後は初代シヨーン・コ
ネリー以来最高のボンドだと絶賛
されました」

『007』シリーズの魅力は、な
んといっても主役であるジェーム
ズ・ボンドのファッションや立ち
居振る舞いだ。ボンドはスタイル
アイコンとしても影響力が強く、
しかも正統派の英国紳士スタイル
と少し違っていることに注目が集
まる。ネクタイの結び方はシンゲ
ルノットを好み、原作では「ウイン
ザーノットの男は信用できない」と
いう台詞が飛び出すほど。また、
スーツにはセオリー通りの紐靴で
はなく、スリッパオンを合わせる
ことも多いなど、決して正統とは
呼べない装いを披露する。

「王道からはやや外れながらも個
人のルールを貫いていることが、
コスモポリタンな紳士として支持



『007』の

ジェームズ・ボンドに垣間見る 英国紳士の伝統と前衛

THE MAN
WHO IS GOOD AT
WEARING



2019年6月にチャールズ皇太子が撮影所を訪問。“ボンドカー”と呼ばれるアストンマーティンの前で、ダニエル・クレイグと談笑の様子が見られた。

されているのでしようね。ただ、カプリックスを直す仕草は、いかにも英国紳士的。チャールズ皇太子にもよく見られる動作ですが、ボンドはアクションのピリオドとしてカプリックスを触ります。そうすることで、見ている側は次の局面に移ることがわかるのです」

さらに、今回の悪役は『ボヘミアン・ラプソディ』でフレディ・マーキュリーに扮し、アカデミー主演男優賞を受賞したラミ・マレック、音楽はグラミー賞で合計5冠に輝いた18歳の天才歌姫ビリー・アイリッシュが担当。その時代において最もラグジュアリーかつ新鮮で、いちばん注目を集める要素が集結しているのが『007』シリーズの魅力でもある。

「お金を積み重ねばほとんどのことができる時代に、同じ価値観を共有できるブランドやアーティストだ



写真はロケ地であるジャマイカで開かれたローンチイベントより。リラックスしたムードの着こなしも実にスマートだ。

けにしか門戸が開かれていない。ある意味、格式あるジェントルマンズ・クラブのような排他的な精神が、魅力に映るのでしよう。21世紀のボンド映画は、それまでの偉大なるマンネリズムを嘲笑うかのような、いい意味で期待を裏切る、英国らしい伝統と前衛を表現しています。そういうシニカル

で、ウィットに富んだ知的な遊びが時代の空気とシンクロして、ひとつのプラットフォームになっていったという印象を受けています」

『007/ノー・タイム・トゥ・ダイ』は、そうした側面にも着目して鑑賞してみてもいいだろう。延期となった公開が待ち遠しい。

服飾史家・エッセイスト

中野香織

株式会社Koari Nakano代表取締役、昭和女子大学客員教授。ファッション史やモード事情に関する執筆・講演を行う他、企業のアドバイザーを務める。ダンティズムやジェントルマンシップの研究でも知られる。東京大学大学院終了後、英国ケンブリッジ大学客員研究員、東京大学教養学部非常勤講師、明治大学国際日本学部特任教授を務めた。『「イノベーター」で読むアパレル全史』（日本実業出版社）、『ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史』（吉川弘文館）など、著書多数。

Movie Information

『007 ノー・タイム・トゥ・ダイ』

公開：2020年11月20日(金)

全国公開予定

配給：東宝東和

